



第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

板垣, 貴志
木村, 修二
坂江, 涉
添田, 仁

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 10(平成23年度事業報告書):37-39

(Issue Date)

2012-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003860>



けて8回実施の予定である。毎回、受講者には講読範囲を予告し、下読みしたうえでの積極的な参加を求めている。受講申込者は28人。

今年度は2回、1月と2月に実施された。第1回は1月19日、テーマは「古代の人々の信仰」（古代）、担当は古市講師、出席者23人。第2回は2月14日、「荘園と公領」（中世）をテーマに担当は樋口講師、受講者19人。毎回、活発な質疑や意見交換がみられた。

町史の成果を各集落にひろげようとする大字誌編纂の動きも広がっている。昨年度のフォーラム「大字誌を作ろう」に続いて、本年度は7月1日、「大字誌勉強会」が行われた。編纂に向けて動き始めている北恒屋・土師・岩部・中仁野の4集落が集まり、現状を報告しあい、今後の進めかたを協議した。

その後の動きを報告する研究発表会が当連携センターと共催で2月16日に開かれた。発表したのは土師集落で、屋号から生業、墓碑から先人を探るといふ地域に密着した調査内容はその全体構想とともに注目をひいた。坂江氏の講演「地域歴史遺産の活用事例」は具体的で参考としたいと受け止められた。また、特別報告として三木市の進藤氏から久留美村史編纂の紹介があった。

現在、姫路市、ひいては西播磨での活動拠点が構築できないかと姫路市の関係部局（市長部局・市教委）との接触を続け、連携の方向を探っている（11月17日、12月27日）。当面は町史史料の保存と公開が課題となる。

（文責・大槻守）

（2）地域史惣寄合報告集の刊行

地域史惣寄合は、2010年7月10日・11日に兵庫県姫路市・日本城郭センターにおいて開催された。その際、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが共催にあたったという経緯から、この報告集も同センター報告書別冊『第二回地域史惣寄合報告集 地域史と住民・自治体・大学』（地域史惣寄合呼びかけ人編）として刊行する運びとなった（呼びかけ人は吉田伸行・塚田孝・大槻守・奥村弘氏）。

本年度は前田と古市が中心となって編集にあたり、2012年3月末に刊行する予定となっている。本書は国公立大学の地域連携関連部局や歴史関連講座のある諸大学図書館を中心に配布される予定である。

（文責・前田結城）

第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

歴史資料ネットワークへの協力・支援

（1）災害対応関連

2011年3月11日に発生した東日本大震災および翌日の長野県栄村地震を受け、当センターは史料ネットに協力して、センターのスタッフが被災地入りして被災した歴史資料の救出活動を支援した。現在も支援は継続中である。

また、2011年9月に発生した台風12号は、和歌山県を中心に住宅被害・人的被害をもたらした。兵庫県下でも被害が出ているとの情報を受けて、当センターは史料ネットと協力し、県下被災地の状況把握を行った。



2011年9月9日には、地元自治体と連絡をとりながら加西市、加古川市、高砂市を巡検し、法華山一乗寺（加西市）と長楽寺（加古川市）で地滑り被害の状況を視察した。また、高砂市史編纂室の高松・清水両氏と高砂市域の浸水地を巡検した。いずれも建物被害は甚大であったが、歴史資料の無事を確認できた。

今後とも、生活復興と密接な関連をもつ資料保存の意義についての提起などを史料ネットとも協力しながらおこなっていききたい。

（文責・板垣貴志）

（2）神戸市兵庫区平野地区における活動

平野地区での活動の中心は、「奥平野古文書勉強会」への参加である。2010年2月に第1回目を行って以来、ほぼ1ヶ月に1回のペースで開催

されてきており、本年度も同様のペースで開催されてきた。すべての例会で木村がチューターを行っている。参加者の実力は確実に上がってきており、テキストの進み具合も相当早くなっている。会員は、退会者と新入会者とがあつたが昨年同様12名に固定している。本会は次年度以降も継続することになっている。（文責・木村修二）

たつの市の八瀬家住宅の襖資料の救済・修復

2011年5月29日に発生した台風2号により、たつの市指定文化財「八瀬家住宅」（旧龍野藩郷目付西組大庄屋／たつの市揖西町中垣内甲296番地）の仏間の2枚の襖が被害（風被害）にあった。5月31日にたつの市教育委員会からセンタースタッフの河野未央氏あてに水損資料の処置に関する相談が寄せられ、6月8日、河野氏のほか、松下正和氏（史料ネット／近大姫路大講師）と坂江が現地に向かい、被害調査等を実施した。

その結果、とくに襖については、下張り文書が乖離した状態（風被害による）では、表紙上張りにも悪影響を及ぼすことが懸念されたため、修復を念頭においた解体処理をおこなう事を決定。7月8日、紙資料修復の専門家である尾立和則氏に依頼して、仏間襖の上張り・下張りのはがし作業を実施した。

その後、8月30日には、センターと史料ネットが共同して、下張り文書の概要把握調査をおこない、その中の一部には、中垣内村の「年貢免状」が使用されていることが判明。これらの文書等をめぐる研究成果を11月に開かれる八瀬家の「特別公開」時に展示・公開することが決められた（同企画については第2章を参照のこと）。

同下張り文書の全容については、未だ調査がすすめておらず、来年度以降、継続的な調査、およびその公開・活用等が望まれるところである。（文責・坂江渉）

石川準吉関係資料の整理

昨年度に引き続き、生野鉦山史研究の第一人者であった石川準吉旧宅（目黒・藤沢）にのこる約5,000点の新出史料群（石川通敬氏所蔵）の概要調査（資料の表紙を撮影し、目録を作成する作業）を行った。調査の日程、参加者については、

以下の通り。

- ・第6回 2011年6月13-14日
参加者：三村、金玄、前田、添田
- ・第7回 2011年8月9-10日
参加者：三村、井上、三角、添田
- ・第8回 2011年9月14-15日
参加者：三村、前田、三角、添田
- ・第9回 2011年12月13-14日
参加者：三村、添田

文書はすべて古文書箱（147箱）に詰め、三菱トランクルームに移管した。今後の写真撮影作業は、同所で行う。また、その一部について写真撮影を行い、目録を作成した。（文責・添田仁）

神戸市神出町の農会関連資料の調査

神戸市西区神出町のN氏より、農会関連資料の調査依頼があり、2011年7月5日に坂江渉氏と板垣貴志および農会関連の専門家である深見貴成氏（神戸市立工業高等専門学校講師）の3名で、同氏宅を訪問調査した。聞き取り調査の後、資料を借用して目録作成と分析を行った。

農会関連資料の総数は30点で、昭和戦前期の老ノ口部落農会の事業報告書や経費収支予算書、決議書、奨励金交付申請書などが含まれていた。借用資料は、2012年3月末に返却する予定となっている。（文責・板垣貴志）

長濱家文書の調査・展示

長濱家は、摂津国菟原郡脇浜村（現、神戸市中央区脇浜町）に居をかまえ、江戸末期には「播磨屋」という屋号で商売をし、明治期以降には村役人もつとめた家である。とくに長濱礼蔵氏は、神戸実業銀行の設立など地元経済の発展にも尽力し、神戸市議会議員までつとめている。同家所蔵の古文書の点数は1,926点におよぶ。作成年代は、江戸時代の中期から大正・昭和期までと幅広い。内容は、脇浜村や葺合区の行政にかかわる史料と、長濱家の家政にかかわる史料に大別される。

この長濱家文書は、阪神大震災で被災した。1995年4月13日、被災史料の巡回調査を行っていた歴史資料ネットワークのメンバーによって確認、緊急措置として神戸大学に搬送された古文書

である（坂江渉「阪神・淡路大震災と地域文献資料のその後」『第8回歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集 震災から15年—地域歴史資料の現在—』、2010年）。

1997年から、日本史教室の古文書合宿、さらには史料ネットが市民とともに行った「被災史料整理」で目録カードを作成した。それでも半分以上が未整理の状態だった。その後、2006年度から文学部海港都市研究センターが行った神戸・兵庫港関係史料調査で全点の目録が完成、2009年度には同地域連携センターが画像データを作って整理を完了、2010年5月10日に所蔵者へ返却した。

実は、長濱家文書は多くの災害をくぐり抜けてきた。阪神・淡路大震災は勿論のこと、1945年の神戸大空襲も奇跡的に回避していた。長濱家はもともと神戸市葺合区（現、神戸市中央区）にあったが、1940年に軍需工場の用地として接収されてしまい、現在の場所に引っ越してきた。直後の1945年3月の空襲により、葺合区を含む神戸市東部の海岸部は壊滅的な状態となったという。

このような特異な経歴を有する長濱家文書について、3月22日-23日、「神戸葺合の歴史と長濱家（仮）」と題して学内（文学部小ホール）での簡易展示を行った。「山の利用をめぐる」「葺合区のなかの脇浜村」「魚市場の面影」「災害と長濱家」といったトピックごとに、大学院生・学部生が協力してコンテンツをまとめ、パネルを作成して、現物とあわせて展示した。なお、5月には、神戸生涯学習センター・コムスタこうべにおいて、あらためて展示を行う予定である。

（文責・添田仁）

第4章 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

本年度はいくつの団体に協力して、次のような震災資料に関する報告や意見交換会などを催した。

① 2011年10月20日

S 科研グループの第11回地域歴史資料学研究会において（人文学研究科）、佐々木和子が「阪神淡路大震災における震災資料」と題する報告をおこなった（地域連携センターと、阪神・淡路大

震災資料の保存・活用に関する研究会が協力団体として参加した）。

② 2011年11月18日

国際資料研究所主催の「DJI セミナー」が松本大学にて開かれ、佐々木和子が、「記録を作り、記録を残す—次代へ伝える経験—」と題する報告をおこなった。

③ 2012年2月21日

東日本大震災支援の一環として、岩手大学附属図書館、東北大学附属図書館、岩手県立図書館、宮城県立図書館の職員の方々と、「被災地図書館との震災資料収集・公開に係る意見交換会」を開き意見交換をおこなった（神戸大学附属図書館にて）。

（文責・佐々木和子）

第5章 地域歴史遺産の活用をはかる人材育成（学生・大学院生教育）

地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成教育プログラム

人文学研究科地域連携センターでは、平成16年（2004）度から平成18年（2006）度まで、工学部建築学科などと協力しつつ、文部科学省の支援をうけ、「地域歴史遺産を活用できる地域リーダー」の育成を目的とする学生教育プログラムの開発に取り組んできた（文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム）。このような事業によって開発された教育プログラムが、平成19年度から文学部と大学院人文学研究科の正式科目として採用され、とくに人文学研究科では、「地域歴史遺産活用研究」「地域歴史遺産活用演習」（前期課程）と「地域歴史遺産活用企画演習」（後期課程）の3科目が、研究科内の「選択必須共通科目」として位置づけられることになった。

地域連携センターでは、平成19年度来、これら3つの科目の授業内容と素材を提供している。

3つの科目のうち、「地域歴史遺産活用研究」（学部講義名は地域歴史遺産保全活用基礎論A・B）は、各地の地域歴史遺産の現状と課題を把握し、その活用のための基礎的知識と能力をつける入門講義である。

また「地域歴史遺産活用演習」は、地域歴史遺産の分類・整理・解説・展示活用などの実践的方